



ガイアの夜明け 挑む100人 2015年7月1日発行 掲載記事 第3章 危機に立ち向かう 大工を育てないと未来はないんだよ。

大工を育てないと未来はないんだよ。

秋元久雄（平成建設社長）



静岡県沼津市の平成建設にて

あきもと・ひさお
1948年、静岡県生まれ。73年、
拓殖大学を中退し、大手住宅
メーカーやゼネコンで営業を担
当。トップセールスマンとして
活躍。1989年に平成建設を設
立。

東日本大震災からの復興や2020年の東京五輪などで、いま建設需要が急激に膨らんでいる。ところが、現場で作業する職人の人数が足りず、工事が大幅に遅れたり、建設を延期するケースが出てきている。職人を募集しても、危険、きつい、汚いの「3K」のイメージがにつきすぎ、若手はなかなか集まらない。いまや現場を支えているのは55歳以上のベテランが3割を占め、29歳以下は1割ほどにすぎないという。

そのような人手不足の建設業界の中で、若者が殺到する会社がある。しかも、そのほとんどが高学歴の学生たち。その会社とは、静岡県沼津市にある平成建設である。平成元年（1989年）に創業。社員545人のうち211人が職人だ。しかも9割以上が大学や大学院を出た、いわば高学歴の大工集団なのである。

この会社を一代で作りに上げたのが、秋元久雄さん。大工の家に生まれた秋元さんはゼネコンに入社し、営業担当になるとトップセールスマンとして活躍した。その当時から、将来職人が不足するという危機感を持ち、自ら会社を立ち上げた。

「大工がいなかったら仕事にならない。大工を育てないと未来はないんだよ。日本で一番優れた技術は大工だったんだから」と秋元さんは言う。

平成建設の職人には、ある特徴がある。鉄筋の組立作業をしたかと思えば、次はコンクリートを流し込むための型枠の取り付け作業に入る。さらに午後には、重機の操作までこなす。これらの作業は、一般的にはそれぞれ専門の業者が行うもの。平成建設では、一人が様々な作業をこなす「多能工」職人を育てているのだ。多能工がいることで、専門業者に頼らず、ほとんどの作業を自社だけで行うことができる。こうしたやり方で業績も右肩上がり、25期連続増収を続けている。

若い職人たちの技能向上を支えているのが、社内で行われる「技能テスト」。東京芸術大学大学院・建築デザイン科を卒業し、入社2年目の川上華恵さんの課題は、釘をせずに木材をピタリと合わせる木組みと呼ばれる技術。柱や天井の梁に使われる難易度の高い技術である。仕事が終わった後の作業場で、自主練習に励んでいた。

技能テスト本番。木組みの技術が2カ所必要な作業を4時間半以内に仕上げなければならぬ。練習ではなかなかまらなかつた木材が、見事びつたりとはまった。審査は先輩の大工が行う。川上さんは、2年目の職人の中で3位だった。

「大工なんて10年でやっと1人前の1年生。その代わりずつとできる。こんな育て甲斐のある仕事はほかにない」という秋元さん。目標は1000人育成である。

（2014年11月18日放送「今こそ、若手職人を育てる！」より）